

第 4 号 (2008.09.25 配信)

新 JICA と協力隊・その 1

10 月 1 日に新 JICA がスタートします。1974 年に初代 JICA が発足し、今度は 3 代目。それも 2 代目までとは根本から異なり、ODA の「贈与(グラント)」と「貸付(ローン)」が初めて合体する事業内容の変動です。組織=部制、職員構成も大きく変わります。

初代は、当時の OTCA と移住事業等が統合され、それぞれの歴史や経緯は違って「ヒトの協力」一本化でした。2 代目は、公団・事業団改革の流れで、今の独立行政法人への運営形態の改革でした。政府機関である以上、時の政府の方針・計画により、基本が定められるのはやむを得ません。3 代目も、小泉内閣の下で立てられた政府系金融機関の統合・整理の計画によるものです。JBIC(国際協力銀行)の円借款部門が現 JICA に合流します。

そもそも ODA は、OECD の開発援助委員会が国際的に統一して定め、運営と事業に加盟国の独自性があります。我が国は、敗戦後の経済復興に世銀はじめ諸外国から借款を受け、いわば汗水流して経済立国を果たした諸経験から、途上諸国への低利・好条件の略称「円シャク(借)」を ODA の柱にしてきました。東南アジア中心に、経済インフラの整備・発展に寄与した実績は、世銀著『東アジアの奇跡』をはじめ幾多の研究・実証があります。

それはさておいて、円シャクは貸付事業ですから、元手を貸し利子を受け取る金融業です。単純に言えば儲けがなければ成り立たない。金貸し業と、一方で「ヒトの協力」「ボランティア活動」とが一緒になってうまくやっていたらどうかと考えるのが自然です。

『ODA 白書』の「開発途上国への資金の流れ」の一覧表を見ると、直近 06 年の贈与中、ヒトの協力(技術協力)が 26 億ドル、無償資金協力 50 億ドルですが、円シャク主体の「政府貸付等」は(-) 2.5 億ドルでした。マイナスは、新たな融資額を返済額が上回ったからです。変な言い方ですが、それほど儲けた、ということ。いくら融資したのかここからは読み取れません。日本の ODA がかつての世界トップの座から 5 位に落ちたのは上記の数字のせいです。単刀直入に言えば「円シャクが稼いだ結果」でした。

円シャクの名誉のためにいえば、『白書』の表から離れ、日本の 06 年の ODA 全体像では、最大の実績が円シャクの 55 億ドルでした。ヒトの協力や無償の上記額を上回っています。これはグロスの数字で、ネットではマイナスになるほどだったと言い換えておきます。仮にグロスでいけば、06 年の ODA は、米国に次ぐ第 2 位の数字でしたから。

いずれにしても、円シャクの目標や実態がこうであれば、ものの見方、考え方が、これまでの JICA とは違うのではないかと。統合・合流を前に相互に事業内容を示し合い話し合った際に、現 JBIC 側から協力隊事業について「こんなことまでやっているのか？」と驚きの声が出たと聞きました。55 億ドルという事業規模からすれば、協力隊の予算額はみみっちい限りです。シニア海外ボランティアなど「定年退職者の救済？」と感じ取れるかもしれない。

それらを現 JICA の関係者から聞いた際、私は、長年金融業にいたら、そう感じてむしろ当たり前ではないのかと思いました。私の友人に、銀行員もいれば、JBIC から JICA 専門家が出た人もいます。彼らにこの話をしたら否定しませんでした。それほど異質な、理解が難しい双方の合流が、果して順調に進んでいくのだろうかと考えます。新 JICA スタートを控えて強調される効率性と、ヒトの協力の根底にあるボランティア性とは、対義語ではないはず。どう理解し合い、どう運営に反映していけるか、どうすれば心底から融け合うことができるのか。外部にいる私たち協力隊応援者にとっては、気を揉みながら注視していかねばならないと思います。「新 JICA と協力隊・その2」は、近日中に記します。

(9月25日記。国際サブロー)